定年後はエクアドルで植林を

鈴木 満
「にこにこハウス」役員（元所沢市職員）

【すずき みつる】昭和26年、福島県河沼郡柳津町生まれ。昭和53年4月、所沢市役所に入職後は一環してごみ処理の現場に従事。平成24年3月定年退職。同年4月、エクアドルに渡航し植林活動に携わる。平成26年4月に埼玉県飯能市に障がい者の就労継続支援事業所「にこにこハウス」を立ち上げ、現在は「にこにこハウス」役員とNPO法人エクアドルの子どものための友人の会（通称SANE）」理事。

キトからカヤンベに

平成24年5月の夕方、私はキトからカヤンベ行きのバスの中にいた。バスはほぼ満席、窓の外には4000mから5000m級の山々が連なっている。赤道直下とはいえ2850mの高地で、窓の風景には乾燥して固い褐色の台地が広がっている。

ここは地球の裏側、南米エクアドル。カヤンベは首都キトから北東にバスで1時間半程度のところにある。バスの中では、時折物売りが乗り込んできてチョコレートや菓子、かみそりなどの日用品を売っている。彼らはひと通り乗客に売り終わるとバスを降りていく。バス代を払った様子もない。バスはいつも満席で、男性に交じり黒いフエルトの帽子をかぶり、ピンクや緑、青、黒などアンデス特有の原色の衣装を着けた婦人も乗っている。

わずか1カ月前までは所沢市のクリーンセンターで働いていた自分が、こうしてエクアドルの地で生活している。あまりにも急激な環境の変化に自分自身が信じられないほどである。

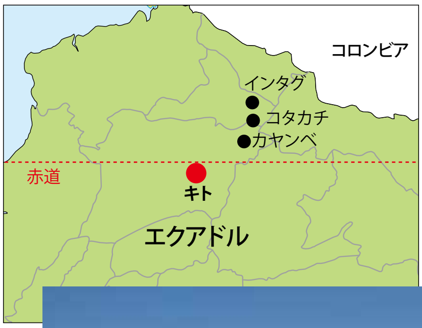
ごみ処理の仕事と環境問題

私はごみ処理の現場に32年間携わってきた。初めは清掃工場のごみ焼却炉の運転に25年間携わった。人口増加と大量消費でごみが増えるにつれて焼却炉も24時間運転となったが、それでも焼却能力を超えたごみがあふれるほど大量の生活ごみ、事業ごみが毎日排出される事態になった。ごみの中身は半分以上が紙類で、当時は段ボールや新聞の束がどんどん燃やされて、田舎育ちの私にはもったいない気がしてたまらなかった。

昭和60年頃から平成にかけて徐々に地球環境問題がクローズアップされ、地球温暖化問題をはじめ森林破壊、熱帯雨林の消滅、砂漠化、オゾン層の破壊、化学物質による生態系の異常などあらゆる環境問題が地球規模で起こっていることに危機感を感じていた。

ちょうどそのころ所沢市でも最終処分場建設問題が出てきたが、都市化の拡大で建設が難しくなってきたこともあり、私は労働組合での取り組みから市民とともにごみ減量やリサイクルを進める市民組織に関わり始めた。その後、清掃工場の老朽化とともに新工場の建替え問題が起こった時にも、環境問題の観点から一層のごみ減量、リサイクルによる最小の焼却能力の焼却炉を建てることを提案してきた。

私は昭和53年に入庁して以降、焼却炉の排ガスから出る水銀問題、焼却炉で生成される酸性ガスやダイオキシン問題に関わって



パネシージョの丘からキト市内を望む。遠くに白く見えるのが噴火しているコトパクシ山

きた。定年間際にはISO14001（環境管理マネジメントシステム）に携わった。ごみ処理には常に温室効果ガスの排出量など環境負荷の軽減が要求された。

SANEとの出会いとエクアドルツアー

平成18年頃だったか、労働組合の呼びかけでエクアドルの教育支援活動の報告会が催された。国名さえそれほど知られていないエクアドルの写真映像を見ながら、私は地球の裏側、インカ文明の地、そして富士山ほどの高地に暮らす人々、高地の環境問題に興味を持って聞いていた。それがSANE（NPO法人エクアドルの子どものための友人の会）との出会いであった。

SANEは本部が埼玉県飯能市にあり、小さいながらも20年近い支援の実績があり、国内でかかる経費を最大限節約してより多くの資金を現地に送っていた。現地ではSOJAE（教育のための日本エクアドル連帯）という団体が確実に高校生に奨学金を届け、校舎や給食室の改善、学校菜園作り、木工技術や溶接技術の指導など現地の人材育成に力を入れているとのことだった。この報告会で私はSANEの代表の杉田優子さんと出会った。

報告会から半年ほど過ぎて、労働組合主催で「スペイン語講座」があり、語学が苦手な私ではあったが興味のほうが優って「ダメもとでも少しは何とかなるだろう」と思い参加することになった。40の手習いではなく50の手習いである。初めてのスペイン語はちんぷんかんぷんだったが、SANEの活動にひかれて会員になった。現地奨学生と文通する日本人を探しているということで、私は辞書を引きながらなら何とかなるだろうと思い手を挙げた。相手はカヤンベに住むクラリッサという15歳の女の子だった。毎月届く本人が書いた自筆の手紙。一生懸命書いたであろう小さく丁寧な文字。どんな人かもしれない日本の支援者に学校の様子や家族の様子を書いた内容からは誠実さが感じられた。日本とは全く異なる国の人からの手紙は心躍るものがあった。

そんな文通をして1年余り、今度はSANE主催で20周年記念のエクアドルツアーを組むという話が持ち上がり申し込んだ。

初めてのエクアドルとエクアドルの環境

エクアドルは、ペルーとコロンビアにはさまれたアンデス山脈の北側部分に位置する国で、首都キトもアンデス山脈の高地にある。

エクアドルという国名は「赤道」に由来し、キトの近郊には赤道記念碑がある。赤道直下とはいえ、高地で凌ぎやすい気候であるアンデスの尾根が国の南北を走り、5000mから6000m級の山々が連なり、キトにおいても高地特有の乾燥に加え一日の中で大きな気温変化がある。

平成21年8月、私はいよいよエクアドルに向けて出発した。アメリカで乗り継ぎ、約24時間かけエクアドルに到着する。ツアーは単なる観光だけではなく、支援しているSOJAEのキト支部とカヤンベ支部の奨学生たちとの交流、家庭訪問、学校訪問、新聞社訪問があった。雲霧林（常に雲や霧のかかっている場所に発達する森林）に多様な生物が生息するインタグの町では、鉱山開発に反対し、自然保護やコーヒー生産で地域の産業を興すコーヒー農園やインタグコーヒー生産者協会を訪問し、現地の自然保護運動に接した。その運動の理念は、まさに私の思いと同じだった。

カヤンベや周辺地域の山々は、山の稜線まで伐採され、麦畑や牧草地が広がっている。また、カヤンベはバラの産地としても有名で、町の主要な農地はバラ栽培のビニールハウス

が陣取ってしまっている。残された樹木は森林というより、まばらに残った立木という状況である。

昔は森林が広がっていたそうだが、その後に植えた樹木が成長の早いユーカリで、その分多くの水を吸収し周りの木を枯らしてしまうという悪循環に陥っていた。森林伐採は土地の乾燥を促進し、ユーカリの植栽は一層乾燥への悪循環を生んでいる。

強風が吹いたり、雨が多く至るところで土砂崩れが起きたり、コトパクシ山頂の万年雪が毎年２ｍずつ後退しているという話を聞き、確実に地球規模で環境が変わってきていることを実感した。カヤンベの山々の森林が無残に伐採され丸裸になっている惨状に衝撃を受けたことが、この地に植林しようと考え始めたきっかけである。

定年退職したら植林しよう

帰国後、ごみ焼却と地球温暖化対策が私の心の中に重くのしかかってきた。温暖化は間違いなく地球規模で起きている。しかし日本は相変わらず大量生産、大量消費、大量廃棄、そのうえ大量焼却の時代に入っている。こうした矛盾を目の当たりにして、私は「定年退職後には二酸化炭素を排出する側から、吸収する側になろう」という思いを強くしていった。

平成15年に新しいクリーンセンターができごみ焼却炉に焼却熱を利用した発電設備がつくと、発電とごみ減量、リサイクルの推進が相反することになった。そのため、私の中では再雇用の道は全く考えられなくなった。

定年後の道を模索していた私が、ＳＡＮＥの杉田さんにエクアドルで植林活動ができるかどうか尋ねたところ、ＳＡＮＥの過去の実績から、ＳＯＪＡＥのカヤンベ支部が受け入れを了承してくれた。私はスペイン語をほとんど理解できなかったが、ＳＡＮＥが現地で得ている信頼とＳＯＪＡＥのスタッフを頼りに植林を決意した。

初めて単独でエクアドルにわたる

平成24年３月に定年退職。待ちに待った日が来た。定年後１カ月も経たない４月24日、私は日本を出発した。現地の空港では、前回のツアーで知り合ったベロニカが迎えに来てくれた。ベロニカとはツアー後に数度メールでやり取りをして、出発前にも飛行機の便名、時間を知らせておいた。

カヤンベでは、ＳＯＪＡＥスタッフで学校の農業技術を指導しているヘルマンが、部屋を確保して迎えてくれた。私は到着の翌日から、ヘルマンと共に土壌改良剤や堆肥の購入、苗木の注文など植林の準備を始めた。学校との調整はヘルマンがやってくれた。

準備期間は１カ月近くあり、私は空いた日に、カヤンベで花やイチゴの品種改良をしている西川公一郎さんの農園でボランティアをした。カヤンベには西川ファミリーの他、ＪＩＣＡの日本人スタッフがいた。ヘルマンをはじめＳＯＪＡＥのスタッフに現地の日本人と緊密な親交があったおかげで私の滞在もスムーズだった。

カヤンベから車で１時間のところにあるコタカチには、前回のツアーで案内してくれた和田彩子さんが住んでいた。和田さんは現地の方と結婚され、有機農法の農園、コンポストトイレ、自転車を利用した足こぎの洗濯機など省エネ、省資源の生活を実践し、手作りのエコ住宅も建設中であった。畑の畝は斜めにして雨水が流れるようにし、貴重な水を無駄なく利用している。和田さんの徹底したエコ生活ぶりを見て、私は環境保護を唱えながら、物があふれた生活の中で感覚が麻痺してしまっていたことを恥ずかしく思った。

２つの学校に植林

植林の準備が整い、いよいよカヤンベにある２つの学校で植林をすることになった。一つは「ルイス・ウンベルト・サルガド校」、もう一つは「ウンベルト・フェロ校」で、それぞれ８００本ずつ植林をすることになった。

「花や実をたくさんつけ、鳥や動物が集まる樹木を植えたい」という私の意向を受け、ヘルマンが苗木を準備してくれた。１６００本の苗木は事前にそれぞれの学校に運んであった。

ルイス・ウンベルト・サルガド校での植林風景。
父母がみんなで協力しています

最初は、ルイス・ウンベルト・サルガド校で植林した。当日、一輪車やバケツなどの道具をそろえて学校へ向かう。幹線道路から外れると玉石を並べたでこぼこ道で、左右は雑草しか生えていない乾燥した台地。登り始めて20分で、山の中腹の斜面に建つ学校が見えてくる。学校では子どもたちの父母が30人ほど集まり待っていてくれた。

作業はまず、事前に届けておいた堆肥と土壌改良剤を混ぜ合わせるところから始まった。風が強くほこりが舞うが、現地の人々は平然としている。

土壌ができるといよいよ穴掘りが始まる。周辺にほとんど森林がなく、一日中乾いた強風にさらされた土はカチカチになっていた。固すぎてなかなか掘れないため、何人かが自宅からバールのような道具を持ってきた。これで少しずつ穴を掘っていくのかと思うと気が遠くなった。

ようやく深さ30cmほどの穴を掘ると、堆肥と土壌改良剤を混ぜた土を入れながら苗木を植える。ここにバケツの水をかけていく。こうして3日間植林をしたが、800本はやりきれなかった。しかし、その1週間後に行ってみると、すべての苗木が植えてあった。現地の人たちだけで作業してくれたのだ。

植林後2年間は定期的に水をかけなければならず、配管が必要だと言う。材料さえあれば自分たちで取付けると言うので、私は後日、配管一式を購入して届けた。10日後に行ってみると、その言葉通り配管され、きちんと水が出るようになっていた。

もう一つのウンベルト・フェロ校は、SANEが以前から支援していて、学校菜園では麦、ジャガイモをはじめ多くの野菜も栽培している。また、溶接や木工の技術指導もしているため、SANE、SOJAEに対する地元の信頼は厚かった。

こちらの土地は緑が多いため土に保水力があり、土質もやわらかい。学校では今回の植林を教育の一環として全生徒を参加させ事前に穴掘りや苗木の準備をしてくれていた。そのため、800本の植樹もあっという間に終わった。

こうして予定していた2つの学校での植林が無事終了した。私が帰国のためカヤンベを去る日、学校では現地の人々も集めて送別会を開いてくれた。

エクアドルの人々との温かい心の交流

これまで、私が接したエクアドルの人々はみんな親切だった。SOJAEスタッフのヘルマンはずっと私に付き合ってくれた。作業のある日は毎日迎えに来てくれたし、時にはSANEが支援している学校にも連れていってくれた。

多くの学校で菜園を作り、学校給食に使っていた。学校菜園は栄養改善という意味でも大きな成果を上げていた。「教室に光を」という運動では屋根に穴をあけ、暗い教室に光が差し込むよう透明なプラスチック板を貼っていた。これもSANEの支援によるものだ。

カヤンベで薬局を営むウィルソンは、ビルの一室をSOJAEの事務所として提供し、奥さんとともに奨学生たちを支援をしている。私を結婚記念日に招待してくれたり、自分の生まれ故郷イバラの町に連れて行ってくれたりした。

教員のダーウィンは、毎日仕事が終わるとSOJAE事務所に来て奨学生の話し相手になったり面倒を見ていた。おかげで私も毎日事務所に顔を出し、インターネットで日本にメールを送ることができた。

カヤンベの道路は、結構ごみが散乱している。通行人がポイ捨てをするからだ。間借りしていた家の前もごみの散乱が目につい

(上) ウンベルト・フェロ校での植林風景
(左) 3年前に植林した木。厳しい環境のもと成長も遅い

た。私はホウキと塵取り、ごみ袋を買い込み朝7時前から道路の清掃を始めた。すると、近所の店員も毎朝お店の前を清掃し始めた。間もなく互いに挨拶するようになった。帰国するまで朝の清掃が日課となった。

3度目のエクアドルへ

平成27年8月、SANEのツアーがあり13名の人々と参加した。3度目のエクアドルである。3年前に植えた木がどれほど成長しているか、3年前に出会った人々はどうしているか会いたくなった。

今回のツアーには植林をした学校訪問もあり、あの玉石ででこぼこの道を20分ほど登ったところに懐かしい学校が見えた。学校では子どもたち全員と大勢の父母たちが待っていてくれた。

子どもたちとの交流後、植林の場所を見に行くと多くの木がすでに消滅していた。無事に育った樹木はティエロとアリソで樹高1m。ヤワルは根付いたものの樹高は40cmしかない。植林したうち残った樹木は1割、予想した以上に厳しい残存率だ。いやそれだけ厳しい自然環境なのだ。2カ月間、雨が降っていないということだった。

SANEでは、この経験を生かし、今年、公益社団法人国土緑化推進機構の交付金事業の支援を得て、ティエロとアリソの2種の木を中心にさらに植林を進める計画である。強風にさらされる土地で、継続して植林事業を進める必要がある。この地に適した樹木がわかっただけでも成果というものだ。

3度目のツアーでは、インタグ地方で自然循環型生活と雲霧林で育てる有機コーヒー農園を体験した。ツアーの最後にはエクアドルの日本大使館にも招待された。SANEの活動が認められてきた結果だと思う。

エクアドルに行く度に、さらに大きな課題ができる。私にとってエクアドルとの関係は切っても切れないような気がする。

定年後にこそ人生の醍醐味がある

私は植林活動の帰国後1年間、NPO法人の福祉事業所で事務仕事の手伝いをさせてもらった。この事務所で働く佐藤智恵美さんとはエクアドルツアーで知り合った。

佐藤さんの「障がい者を受け入れる事業所がもっと必要」という思いに賛同し、平成26年、埼玉県飯能市で新たに障がい者の就労支援事業所「合同会社悠にこにこハウス」を5人の仲間で立ち上げ、私は福祉の道を本格的に歩んでいる。今は福祉が本業となり、合間にSANEの手伝いをしている状況だ。

定年後はこれまでと違い、仕事や活動の選択ができることが何よりも楽しい。今は現役時代より忙しく、充実した日々を送っている。私ももうすぐ64歳、人生の佳境に入っている。明日への課題を持っていることが活力になるし、人生を豊かにすることと思えるようになった。「忙中閑あり」「壺中天あり」である。私の人生で幸せだったことは、いつもわが師とも言える人が近くにいたことである。ごみ問題、環境問題、SANE、福祉、まさに「意中人あり」である。

還暦を過ぎていつも思い出す言葉は、「老いて学べば即ち死して朽ちず」。まだまだ頑張れるような気がする。